

## 展 望

## 青年期の臨床的研究

鑑 幹 八 郎

(広島大学)

「青年期の臨床」という主題で研究の展望を「あまり臨床的にならないように」することは難しい。一応ここでは、青年期を臨床心理学的観点からとり上げた研究の展望を行うが、処遇、治療教育、カウンセリング、心理療法といった領域はとり上げないということでその任を果たしたい。心理臨床の研究の中心は、どのように当面の問題を対処するかというところにあるようにも思うが、当面の問題を対処する前に「どのように心理学的に理解するか」という問題がある。これは対処後の失敗や成功の経験からも、あるいはこれまでの諸先人の努力の研究結果からも導かれるものである。いずれにしても、一個の人間の対人関係上の困難な問題に立ち向かい、解決しようと努力する過程の中から生まれてくる心理学的な問題の理解ということに焦点を当てて展望を行ってみたい。

## 1. 青年期に関する心理臨床的研究の特性

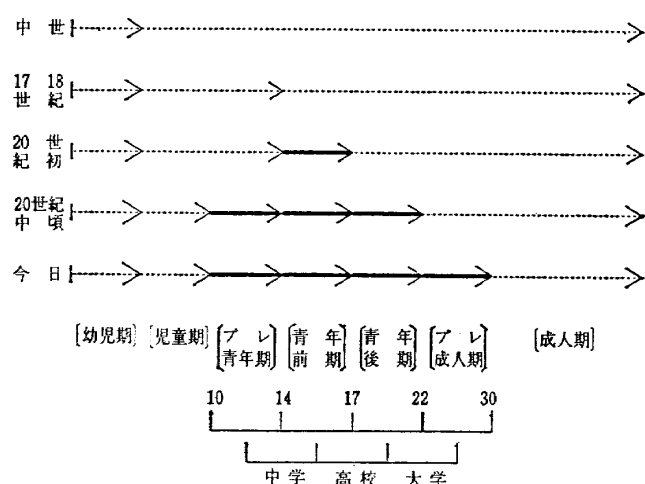
心理臨床の立場から青年期の問題をとり上げるには色色と難しいことが多い。今日、登校拒否、家庭内暴力、暴走族、シンナー乱用など様々の社会問題となっている主人公たちが研究の対象になるので、話題ということではたいへん賑やかである。しかし、これらの問題現象や行動に直接関わっている人達の、問題現象や行動に関する理解となると必ずしも心理学的とは言えず、社会の常識を上廻るものではない。しかし、かといって、心理臨床からの青年の理解の場合、単に研究者の認識的欲求を満たせばそれでよいというわけにもいかない。というのは、まず現実の事態の收拾、問題の解消を迫られるので、問題現象の理解は同時に対処方法を内在しているようなものでなければならない。しかも、現実の混乱した問題事態に入りこめば入りこむほど、対象や自己の行動の客観性を維持することが難しいので、いわゆる研究の水準、つまり個別的知識や経験を普遍化したり、一般化したりする言語化が難しいのである。このような現状の中で、ほんとうに徐々に蓄積された経験をもとに研究が進められているのである。

さらにもう1つの特性は、日本の心理学の体質に関連するものである。日本の心理学界は、戦後、米国の心理学の圧倒的な影響を受けたし、現在も受けている。それ

にも拘らず、米国心理学会のもつ社会的関心、社会的発言力、現実的問題への関与力がほとんど全く欠如しているところがある。例えば、心理臨床に深い関係のある「心理学者の倫理基準」は米国心理学会において1938年から委員会が設けられ、1952年 Nicholas Hobbs を議長として Ethical Standard for Psychology (A.P.A.1952) が作りあげられ、それ以後、幾度か改訂され今日に到っている。現在、「心理学者の倫理基準」(A.P.A.1966)、「産業心理学者の倫理基準」(A.P.A.1964)、「心理検査法の規制に関する規定」(A.P.A.1966)、「開業心理学者の登録規定」(A.P.A.1960)、「心理学者の倫理基準・事例集」(A.P.A.1967)、「心理学研究における人間被験者および動物被験体の使用に関する指導要領」(A.P.A.1963) などがある。また心理学者の社会的活動を規定する免許法が、1945年コネチカット州に成立して以降、現在までにはほぼ全州に亘って制定されている(A.P.A.1981)。これに対して日本心理学会は、1960年ごろよりこれらの問題について議論はしているが、全く現実化していない(佐藤忠司1983)。これらの理由を日本の心理学研究や心理学者の後進性に求めることはできないであろう。というのは日本の心理学の研究は世界的にみて決して低い水準にあるとは言えないからである。むしろ、これは、日本文化を荷った心理学の歴史性と学者の性格といったことに求められねばならないのかもしれない。いずれにしても、上にのべた2つの特性は、現実的な問題に直面して問題をとらえ解決して行こうとする臨床的研究を難しくしているものであろう。

## 2. 青年期の区分について

青年期は学校教育制度、少年法、児童福祉法などの社会制度上の区分と密接して対応している。また社会経済的な問題とも結びつき、まだ青年期をもっていない文化社会も存在している。また歴史的にも変動を示す概念である。青年期が独立して心理学的に研究されるようになったのは、笠原嘉(1976)や Proefrock (1981)らの研究が示すようにごく最近のことである。参考に笠原のあげている図を次に示しておく。



**FIG. 1** 青年期の延長とその区分 (数字は年齢を示す)

Proefrockによると青年期の概念は Rousseau, J. J. の「エミール」まで遡れること、Aries の「子供の世紀」を経て、Hall, S. の「青年期」(1904)によって本格的に心理学的な概念になったという。西田博文 (1976) も心理学的青年論としては、Hall, S., Spranger, E. (1926) をあげている。今世紀初頭のこれらの研究の次に、1930代から文化人類学からの研究として Mead, M. (1929) などの未開社会の研究の青年期研究への影響があげられる。これらの研究は青年期の研究に文化的な相対的観点を持ちこんだという点で重要であった。自国文化における普遍的な問題と文化固有のもののあることを研究者にきづかせた。これ以後、この文化的相対性問題は、ことに青年期のように社会の現実によって変貌しやすい時期の研究上の必要不可欠の留意点となったといっていよう。ところで、戦後、青年心理学研究を著しく促進させる契機をつくったのは Erikson, E. H. であろう。Hall の青年心理学が当時のヨーロッパのロマン主義を中心とする教養小説に影響を受け、青年期の中心的主題を「Strum und Drung」としたのに対して、現代の青年の心理を「私は何者であるか、何者であり得るか」の主題として受けとめ、この鍵概念として Ego Identity という用語をとり出した。この Identity の概念はたしかに現代の青年の心理の中核をうまくとらえている概念であり、一連の Erikson の Identity 研究は青年心理学の研究や青年の臨床的分野を著しく発展させるとともに活性化させた。このことについては章を改めて後述する。

日本の場合、青年期はどのような歴史的経路をたどってきているだろうか。日本では明治5年(1872年)学制が施行されるまで、工芸、芸能など技術を必要とする分野では、徒弟として修業し、知的な学習も寺小屋で学ぶといった形をとっていた。この中で、成人として一人前

になる以前の学びの時期を一種の Moratorium (Erikson) として用意していた。明治に学制が施かれ、学校教育が次第に整備され、重視されるようになると、青少年期としての Moratorium は次第に確立していった。このことはことに戦前の高等学校の生活に見事に示されているといえよう。一部の特権的な青年の Moratorium として、弊衣被帽や蛮行が大目にみられていた。旧制の高等学校が廃止されて30年以上も経過しているが、現在もこの特権的 Moratorium を懐しむ人(但し経験者のみ)の多いのは、青年期の Moratorium のもつ意義を考える上で興味深い現象である。青年期が一般的に、日本の社会で問題にされるようになるのは戦後の学制の改革の後ではなかろうか。1946年より中学3年までが義務化され、高校、大学と制度が整備され、機会の均等がはかられるようになった。そして青年期として注目される高校進学率は1969年に全国的に90%を超え、大学進学率も30%を超えるようになったのである。高校生徒の数は468万、大学生142万人という膨大な数になっているのである(青少年白書昭57年)。このように時代の推移によって青年期の問題は大きな影響を受けることを留意しておかねばならないだろう。

このような時代の流れの中で、1960年代における大学生の学生運動、社会参加の動きは青年独自の心理の問題にわれわれを注目させた。それと全くタイミングを合わせたように Erikson の Identity 論が展開され、青年期の心性理解への積極的な契機をつくったといえるのではなかろうか。

発達の時期として青年期をどのようにとらえるかについて研究者間に必ずしも一致したものはない。笠原も言うように、研究者の得意不得意というか、関心の方向性によってそれぞれ時期の強調点が異なっている。Erikson (1958) が人間生涯という中で青年期を位置づけ、青年期の後半の主題とも考えられる Identity をとり出したのに対し、Sullivan, H.S. (1953) は Preadolescence (思春期) を重要視した。また Blos, P. (1958, 1967) は同様に思春期の問題に焦点を合わせたが、第2個体化 (Second Individuation) をテーマにしているなどである。次にやや静的な観察であるが、笠原 (1967) の臨床的な青年期の図式を示しておきたい。ここでは青年期は10才から30才までの時間間隔をもったものとしてとらえられているのが特色である。生活年齢にとらわれず、心的特性や青年期の症状の消退などからみるとこのように広がった図式となるのも興味深い。臨床的な観点からすると、30才の成人の中にも十分に青年期的心性をもつ人を見出すことができるということになるのである。それぞれの時期を分ける心的特性は何であろうか。笠原

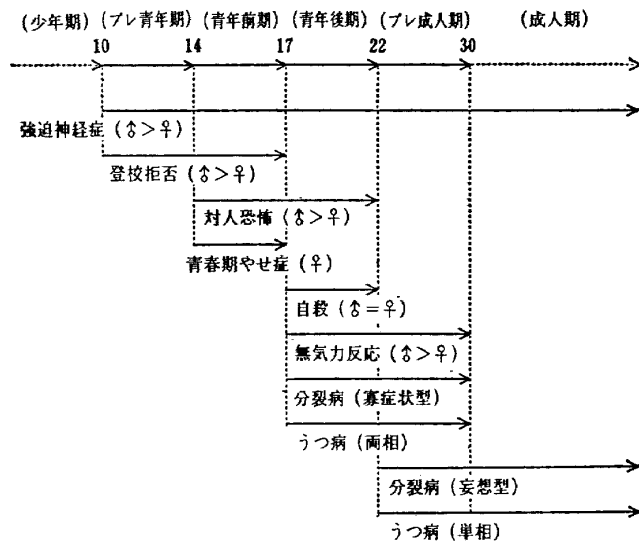


FIG. 2 各期の好発病像 (数字は年齢を示す)

は S. Freud, A. Freud, H. Deutsch, Sullivan, Erikson, Keniston などを援用して説明している。これを表にすると次のようになるのではなかろうか。

表1 青年期の心的特性 (笠原による)

|             |                                         |
|-------------|-----------------------------------------|
| 少年期 →10     | 遊び仲間 playmates, (われわれ) 1: 多の対応          |
| プレ青年期 10—14 | 同性の友人(chum)(彼個人, 彼女個人) 1: 1の対応, 同性との親密さ |
| 青年前期 14—17  | 異性の出現, 友人, テレフォン・エイジ                    |
| 青年後期 17—22  | 自分とは何か, 自分と世界とのつながり, Identity の達成       |
| プレ成人期 22—30 | Identity の確立                            |
| 成人期 30—→    | 社会の生活, 自立                               |

### 3. 最近の臨床的な青年期研究の動向

Eriksonの研究に代表されるが他に1950年から1980年までに、臨床心理学的にみて重要な研究がいくつも出版された。Erikson の流れを汲む Keniston, K. (1965, 1967), Lifton, J. (1963), Coles, R. (1963) らの研究がある。同じ精神分析の流れでは Blos, P. (1971)の一連の研究, Masterson, J. (1974), Harley, M. (1971) Weiner, J. (1970), Lorand, S. と Schneer, H. I. (1961)などの総合的な著書や Sullivan, H. S. (1953)の理論的研究, テンエンジャーに焦点を当てた Offer, D. (1967) の研究, Capland の編集になる精神医学的な著書 (1966, 1969) などがある。Blos, P. の研究の一部を除いて、いずれも1960年代以降のものであることがわかる。

日本においても、これら米国の影響を受けて、青年期研究が活発となった。笠原嘉ほかの編集による「青年期の精神病理」(1976)が契機となって次々と出版されるようになった。心理学の教科書的なものを除いてのべると、笠原嘉の「青年期」(1977), 「精神科医ノート」(1976)が青年期の臨床的問題を世の中の人に知らせるのに大きく貢献した。「青年期の精神病理」は小此木啓吾が第2巻(1980)を編集し、第3巻(1983)を清水将之と村上靖彦が編集して継続している。また鎌幹一郎と上里一郎による「青年期シンポジウム」が開かれており、第1巻「自我同一性の病理と臨床」(1979), 第2巻「自殺行動の心理と指導」(1980), 第3巻「同一性研究の展望」(1984予定)として継続している。また小此木啓吾による Erikson の Identity 論を軸として、社会評論的に論じた「モラトリアム人間の時代」(1978)も臨床的青年期論として一般の関心を高めた。笠原嘉・山田和夫「キャンパス症状群」(1981), 稲村博「思春期挫折症候群」(1983), 福島章「青年心理ノート」(1978), 「対抗同一性」(1979)などが出版され、いずれも臨床的な青年期論として注目された。また既に紹介した Erikson, Keniston, Blos その他の訳書が次々とこの時期に出版された。

これら臨床的な青年期研究の高まりを反映して、米国においては新しい雑誌「Adolescence」が1965年に発刊され、「Youth and Adolescence」が1970年に発刊されている。精神医学の年報「Adolescent Psychiatry」も1972年に発刊されている。英国において1977年から「Journal of Adolescence」が発刊され、日本では西平直喜・藤原喜悦らの編集によって「青年心理」が金子書房より発刊された。毎号主題を定め、特集が組まれると同時に、解説、研究紹介、講座(展望)など充実した編集がなされている。学会レベルでは、米国心理学会の第37部会に「Child, Youth and Family Services」が1978年に加えられた。

日本では1960年に創設された児童精神医学会が、1979年に「児童青年精神医学会」と改称され、その学会誌である「児童精神医学とその近接領域」が、「児童青年精神医学とその近接領域」と改称(1983年より)された。また小児科医を主体とする小児精神神経学研究会が出版している「小児の精神と神経」(創刊1960年)は青年期における心身症の問題の解明に貢献している。

またかなり特殊なものとしては、家庭裁判所調査官研修所が出している「調研紀要」が1962年に発刊され、1983年まで44号を数え、持続して少年非行の臨床心理学的理解に貢献している。総理府青年問題調査室では数多くの調査資料の出版や研究文献の集録を行っている。また

心理学的測定の立場から、年報「ロールシャッハ研究」(1958年発刊)があり、片口安史、空井健三らの編集によって今日まで24号を数え、心理検査法による臨床心理学的青年期理解をすすめている。その他、研究出版物としては、心理相談室のある大学の紀要(京都大学、九州大学、上智大学)があり、保健管理センターの紀要や報告書など、各都道府県市の教育研究所の心理相談部の紀要や報告書などの中に、数多くの貴重な青年期研究の資料が出版されている。

それらが総合されれば膨大な量になるであろう。

#### 4. Identityに関する研究

青年期の研究を臨床的側面からすすめ、今日の隆盛をみる契機をつくったのは Erikson であるといっても異論はないだろう。「幼年期と社会」(1950)の出版以降今日まで、彼の大部分の研究が青年期の研究、ことに Identity の研究に集中したといっていよい。1970年までの彼の重要な著作はすべて日本語に訳されている。Identity 研究や Erikson の研究の展望については別に「青年シンポジウム」の第3集「同一性研究の展望」(1984年)として間もなく出版の予定なので、ここでは特に Identity に関する臨床的な問題に焦点を合わせて展望を行いたい。

Erikson は精神分析家として青年の臨床、ことに境界例、分裂病の人達の治療に当たったのであるが、Identity 概念そのものは、精神分析に止らず、心理、教育、社会、文化人類学などの領域に急速にひろがっていった。臨床的な問題がこのように広範な分野に拡大したことについて、精神分析の臨床畑の人は、Identity 概念のもつ曖昧さと、社会学的志向を批判している。ことに Jacobson E. (1964), Kernberg, O. (1976) などの批判が厳しい。これに対して臨床的な面からの理論的統合が Lichtenstein, H. (Dilemma of Human Identity, 1977) によってなされた。しかし、Identity に関する研究ないし、Identity を鍵概念としてなされた青年期に関する研究は、依然として色々の方向に拡大していつている。Identity 概念が有効性をもつ限り、この傾向が減少することはないであろう。これらの傾向を大別すると3つになるのではないだろうか。第1は、本来の精神分析の臨床の中で治療という場を通じて青年期の問題が考えられていく方向であり、同一性障害の研究といっていよかろう。第2は、Identity 概念を鍵として、青年期の問題をとらえようとするものであり、発達心理学の流れを汲むものである。この中に、個性発達の事例研究の方向で、本質的には第1の臨床的な研究に近いものと、いわゆるこれまでの心理学の伝統にのっとった認識論的な、方法の客観化を

目指し尺度化していく測定論的なものがある。第3は、社会学的な方向や心理歴史的な方向をもつ研究である。Lifton などに代表される方法である。日本では社会学の栗原彬の研究「歴史とアイデンティティ」(1983)などがこの領域に入るだろう。ここでは本展望の性質上、第1の臨床的方向としての同一性障害を重点的に展望する。第2、第3に関しては別の著書(鐘ほか1984)にゆずることにしたい。

もともと Erikson の Identity 概念の基礎となった臨床的経験は、R.Knight (1963)によって先鞭をつけられた青年期の境界例の人達であった。この研究の流れが、Masterson, J. (1972), Jacobson (1964), Kernberg, O. (1975), Gunderson, H. (1979) などによっておし進められた。これらは重症神経症、境界例、精神病などに関する心理学的な理解への努力となっている。この中でも Masterson は青年前期にある境界例の心理療法について M. Mahler の分離・個体化論を土台にして独創的な方法を生み出した。Kernberg も、英国の対象関係論の研究をとり入れ(岩崎1973), Erikson との統合をはかり、独自の境界人格構造論(Borderline Personality Organization—BPO)を提唱した点で特記されるべきであろう。このBPOの判断基準として Kernberg は、Identity 意識の曖昧さ、原始的防衛機制の使用、現実吟味能力の発達などをあげている。これらの臨床的な研究はこれまで治療困難であった境界例の青年たちを心理的に治療することが可能になったのである。この点でも Masterson や Kernberg の研究が臨床場面で働く心理臨床家や精神科医に与えた影響は大きい。

日本で Identity 研究は小此木啓吾(1973, 1978), 福島章(1978, 1979) 鐘幹八郎(1979, 1983)らによって様々に紹介されている。この中で Erikson を精力的に日本に紹介した小此木啓吾の努力は特記される。また、馬場謙一(1976)は、「自我同一性の形成と危機」と題して、自我同一性をその障害の方向から紹介している。岩崎徹也(1980)も同様の方向から「同一性障害と病院精神医学」として紹介している。岩崎の論文では同一性障害を中心とした境界例の人達の病院内における心理力動性を明らかにし、治療共同体としての可能性を示している。これに対し馬場の論文では、同一性障害をもつ青年たちに対する外来の精神療法を中心にして述べている。この中で馬場は次のような Erikson のことばを引用しているが、同一性障害を考える上で重要と思われるので次に引用する。つまり、「精神的な病気についての過度の規制を行い、診断を与え、類型に分けることを熱心に求めるわたしたちの文化では、わたくしが“患者アイデンティティ”と呼ぶものを患者が学習する危険があります」

「精神科医を訪れる青年患者たちは、ただ熱心に診断されることのみを求め、その診断が示唆する役割を身につけ、しまいには、かつては患者でない自分としてのまとまりをもっていただのに、今では、患者としてのまとまりができあがってしまったように見えることもあるのです」(Evans1967)。「このような認識に基づいて、エリクソンは、同一性拡散“症候群”とすることによって、“一過性の精神病のような徴候をもつ患者を“精神病患者”と診断せずにすむと考え、“分裂病”などのレッテル貼りを回避しようとしたのである」(馬場P.124, 1976)。

それにも拘らず、「同一性障害」という形で問題を追求することは、新しい精神障害のレッテル貼りとなり、「患者アイデンティティ」をつくりあげるのではないだろうか。その皮肉な例が DSM-Ⅲ における「Identity Disturbance」という診断名の採用である。米国精神医学会編の DSM-Ⅲ (Diagnostic and Statistical Manual 第Ⅲ版—診断・統計の手引) は1980年に改訂されたが、その診断カテゴリーの中に Identity Disturbance がつくられたのである。これは米国の精神科医が患者を診断し、保険請求や統計資料として報告する時に用いられる診断名である。このようにみると Erikson の基本的な発想であった発達の危機を示す症候群としてのアイディアは、逆にとられた形になってしまったということになりそうである。

Identity を臨床的な面から青年期の問題として追求し、独創的な研究をしているのが木村敏である。木村の研究は「分裂病の現象学」(1975)にまとめられ、それ以前に現象学的自己論が「自覚の精神病理」(1970)、「人と人との間」(1972)、「異常の構造」(1973)として出版されている。木村は自己同一性の形成過程を西田哲学とフッサールの現象学との統合から明らかにしようとした。これらの努力は Erikson の同一性論と起源を異にしながら、同一性の基本構造を歴史性(時間性)と空間性から記述するなど極めて近いところにあるのが興味深い。

次に発達心理学研究者の青年期論としての同一性研究については別の著書(鑑ほか1984)にゆずるが、短いコメントをしておきたい。同一性の研究は発達心理学の領域に入ってくると独得の方法論の客観化が幅を利かせはじめる。対象としての青年期における同一性の問題の興味というより、同一性概念の客観的定義、尺度化といった方法論に重点がおかれることとなる。そのため尺度その他の方法論は厳密になったが、私のような臨床家的立場からみると、全く中味のない無味乾燥な、ただ数値をいじり廻す研究になってしまったように見える。この点は米国の研究においても、それを真似た日本の研究にお

いても同じである。村瀬孝雄(1972)が鋭く批判しているように、日本の青年心理学研究の不毛性の理由の1つはここら辺りにあるのではないだろうか。やはり同一性を真に生きた概念として甦えらせるような研究を行うことが、青年心理学そのものを活性化するのではないだろうか。そのためには、村瀬の指摘にあるように、もっと事例研究を重視する臨床的手法が要求されるべきだと思う。この点で日本の青年心理学の代表的研究者の1人である西平直喜の報告は印象的である。

西平は「青年分析」(1964)、「青年の心理」(1975)、などを出版し、また雑誌「青年心理」の編集者の1人としても知られている。彼は「青年心理」に4つの論文を発表している。「アイデンティティ(1)(2)」(1978)、および「続アイデンティティ(1)(2)」(1978)である。これらの論文は、彼が Erikson の Identity 概念に触れ、はじめはこれを尺度化しようと努力し、やがてその不毛性に気づき、次第に事例研究的な世界に入って行き、ついに「伝記研究」に行きつくまでを記述したものである。Identity 概念に導かれ、たいへん主体的に苦しみながら、次第に臨床的な方向へ進まざるを得なかったことが実感をもって書かれていて、印象深い論文である。アカデミックな発達心理学を専攻する人の中から、このように臨床的に青年期をみていこうとする研究者が出てくるとは興味深い。私としてはこのような研究者がもっと多くなることを望んでいる。

## 5. Identityに深くかかわる青年期の病理

思春期、青年期の心性と深くかかわり、それが病理的な形で社会の注目を集めている幾つかの症状群がある。登校拒否、家庭内暴力、校内暴力、自殺などである。この展望では、臨床的な観点からのものではあるが、どうしたらよいかという処遇、治療教育の問題についてはひかえ、これらの症状群をどのように理解するか、という点に焦点を合わせたい。しかし、もちろんきっちりと現実の理解と治療教育とが分けられるものではない。理解は治療教育によって確かめられ、その経験によって更に理解が進むのが常であり、それが臨床的理解ということの本質でもあるのだから。

ここでは稲村博(1983)によって「思春期挫折症候群」として一括されている、登校拒否、校内暴力、家庭内暴力をまずとりあげ、次に非行群、「キャンパス症状群」(笠原・山田1983)と呼ばれる中で、留年、チューデント・アパシーをとりあげ、さらに病理的なものと考えられる青年のうつ状態、自殺、Gender Identity、やせ症、境界例、分裂病をとりあげてみたい。

### (1)登校拒否

社会の大きな変化の中で、登校拒否、家庭内暴力、校内暴力は家庭生活のあり方、家族関係のあり方、また学校教育の問題との関連でつよく社会の関心を集めている。

米国では Johnson, A. M. (1941)の研究にはじまり、日本でも 1960 年代から佐藤 (1959)、高木 (1962)、鷺見 (1960)、鑑 (1962)らによって研究がはじめられた。今日のところ、米国では学校生活における 1 つの不適応行動として問題にされているにすぎないが、日本では家庭内暴力、校内暴力と並ぶ三大症候群として大きな関心を集めている。今日までに数多くの研究論文が書かれている。これについて、高木 (1983) がよくまとめた展望を行っている。また成書としては、佐藤修策 (1968)、平井信義 (1978)、村山正治 (1972)、稲村・詫摩 (1980)、上出・伊藤 (1980)、佐治・神保 (1979)、内山喜久雄 (1983) などがある。登校拒否の問題は今や思春期心性を示す日本における代表的な症状群の 1 つである。学校の現場での苦慮は大きい。これが義務教育や義務教育化された高校などの学校制度とも深く関係していることは言うまでもない。これまでの症状理論は症児の病理、症児の自我の弱さ、症状を生む家族の病理などに向かっていた。これに対して、もう一方で、このような病理を生んでいる学校の制度、現状、教師の資質など、子供や家族をとりまく社会の病理の理解へすすんでいることに特色がある。この方向からの研究として、「児童青年精神医学会」が 1983 年第 24 回の総会に「登校拒否と現代社会」というシンポジウムを組んでいるのが注目される。

## (2) 家庭内暴力

この問題も最近社会的に注目を集めている。ことに、「開成高校事件」や「早稲田学院高校事件」(本田勝一 1978) など、殺人を伴ったショッキングな事件が発生して、家庭内暴力が一段と注目された。このような家庭内暴力の現象はそれ以前にもあり、それ以後にも数多く増えつづけている。最近穂積隆信氏の娘の記録を描いた『積木くずし』(1982)が話題となった。専門の研究としては、これまで鑑幹八郎 (1979)、稲村博 (1980)、瓜生武 (1983) などがある。稲村の著書はこの問題について全体的見通しを立てるのに役立つ。暴力の実態、経過、原因、本人の特徴、暴力の心理、他の問題行動との関連、社会との関連などを述べている。

まだ実感のレベルでしか言えないが、私としては、家庭内暴力に 2 つのタイプがあるように思われる。A 群は登校拒否型の家庭内暴力とも言えるものである。この場合、開成高校事件や早稲田学院高校事件にみられるように、暴力は家庭内に限定されていて広がらない。外では、ものわりのよい子、おとなしい子と考えられてい

る。基本的には成績のよさ、肥大した自我理想、現実吟味力の弱さがあり、神経症レベルから精神病レベルまでがある。これに対して、B 群は非行型家庭内暴力とも言えるものである。これは A 型とちがって、暴力の表現が家庭内に限定されず、学校でも、学校外でも発揮されるものである。『積木くずし』に代表されるようなタイプの少年たちである。このタイプは暴力を伴う一般の非行と同質のものである。基本的には学業不振、学校での疎外された体験をもち、似たものたちが対抗同一性(福島, 1979)、否定的同一性グループを形成する。A 型については、日本の特徴を示すものとして筆者 (1980, 1981) や小倉清 (Ogura 1982) など比較文化的な報告がある。

## (3) 校内暴力

日本の場合、一種の伝染病のように急激な勢いで、高校から中学へ、都会から周辺部の学校へと拡大していった。登校拒否や家庭内暴力が個人的な病理としてとらえられ、学校全体としてのとり組みがなされないのに対して、校内暴力の場合、学校全体が地域社会をも巻き込んで大きな問題となっていくところに特色がある。

米国では既に 1955 年に「暴力教室」(Brucks, 1955) という映画がつけられ注目をひいたし、最近「処刑教室」(Lester, 1983) という殺伐としたショッキングな映画があった。日本でも「夜をぶっとばせ」(曾根中生 1983) という非行を扱った映画、「積木くずし」の映画化(穂積, 1983) などあり、暴力の主題が積極的にとりあげられるようになった。校内暴力については、瓜生武他「家庭内暴力・校内暴力」(1983)、沖原豊「体罰」(1980)、校内暴力 (1983)、中国新聞社編「ぼくは 15 歳」(1982) などがある。いずれもまだ心理学的な理解の水準に達していると言えず、現状の急救処置的な状態をどうとらえるかといったことが多い。この中で、沖原の研究 (1983) は、比較教育論的に校内暴力を世界の学校教育の中に位置づけた調査結果を示したものでユニークなものである。日本のみが校内暴力で悩んでいるのではないことがよくわかる。このように社会現象や不適応行動を文化的に相対化してとらえる観点は、問題を対症療法的処置や規制のみに終らせず、現代社会の変動と青少年の心的世界の変貌としてとらえることを可能にするだろう。非行としてとらえられる暴力には一応の対応が警察や家庭裁判所などによってつくられているが、家庭外に出ない暴力、学校外に出ない暴力は取り扱いに苦慮することが多い。「戸塚ヨットスクール」について専門家の声はそれほど多くはなかった。これらの問題にとり組み、苦しんでいる心理臨床家などもいるが、小此木啓吾 (1983) や児童青年精神医学の中で、河合洋 (1983)、十

亀(1983)小池(1983)らの指摘にあるように、研究不足、専門家不足、専門施設の不足は日本の現実として受けとめねばならないであろう。

更にこれに関連して言われている紋切型の家族原因論といった風潮について触れておきたい。Federn, P. の「父なき社会」(1919)Mitcherlich の「父親なき社会」(1963)の精神分析学を基礎とした社会学的分析や河合隼雄「母性社会日本の病理」(1976)などによって、父親の家庭内での弱さが指摘されている。登校拒否、家庭内暴力、校内暴力その他、神経症的な問題の家庭に父親の存在が弱いということが注目されている。しかし、従来の「強い父親」という役割論的な発想では問題の理解にも、解明にもならないのではないだろうか。むしろ、役割論は道徳的な規制となって「ダメオヤジ」を糾弾し、過保護の母親を糾弾するという風潮に心理学が貢献することになるに過ぎない恐れがある。ダメオヤジの家族の中でも逞しい人も育っているのである。問われるべきは、何故ある場合は逞しく子供は育つのに、ある場合うまくいかないかの解明であろう。心理学者の仕事はこのような症状の中に組みこまれている家族の心理的力動性を詳細に記述していくことであろう。この点で西園昌久(1983)の父親像の分析はたいへん示唆的な研究である。西園が問題にしているのは、現実の社会的役割としての父親の家族内での強さ弱さではなく、母親の内部にある心的対象イメージとしての父親像の強さ弱さが、青年期の病理に関連しているということである。その点からすると、母—子、父—子という家族関係でなく、母—父の関係の心理力動性であり、父—母—子の三角形的な関係における心理力動性であることが見直されるのである。また父親の問題については、文化的相対論の立場から、他の文化との比較研究が新しい示唆や洞察を与えられると思われる。

#### (4)非行群

非行の発生件数は1982年度において、戦後最大のものとなったことから、その理由について色々の憶測がなされている。非行に関する研究は社会情勢や社会制度などが複雑に絡み合う。その上未成年であることに伴う匿名性によって研究は困難である。現在のところ Healy (1936), Friedlander (1947) や Glueck, A. (1950), Eichholn, A. (1925) の研究を超えるものがなかなか見られないが、地味な研究は続けられている。日本においては、水島恵一(1971)、我妻洋(1973)、家庭裁判所現代非行問題研究会編(1979)、井上公大(1980)らの著書がある。現在、家庭裁判所調査官や鑑別所技官の豊富な経験をもった人達が研究をすすめているので、これからの研究の出版が注目される場所である。個々の主題による研究

は調査官の「調研紀要」(前述)、犯罪心理学会誌「犯罪心理学研究」に掲載されている。

社会的規範(刑法)に違反する青少年が非行の名のもとに一括されているが、その中には様々の行動がある。一括されるべき非行としての共通性は心理的・内的な葛藤を外向きに、対人的・対社会的に社会的規範を犯すという形で処理しようとするところである。行動によって心的な内的葛藤を処理する方法を行動化 acting-out と称している。この点についての心理的理解と取り扱いが進んでいる分野は、後述するように、境界例の研究である。実際に非行にみられる多くの事例が、境界例人格構造(BPO)をもつ人達の行動化である場合が多いのではないかと考えられる。

非行のカテゴリーの中には暴力的表現、性的表現、ものへの執著、薬物依存といったように様々のものがある。これらの行動を心理学的に一括して理解することは極めて困難である。ここではそのいくつかを次にとり上げてみたい。

(1)性的非行——社会一般の性風俗の「自由化」による影響は、青年期の人達への性的関心を増大させ、性的逸脱行動を容易にしている。それに伴って、妊娠、人工流産、性病の増大がみられる。森野礼一(1982)、千田夏光(1978)はこれらについて事例的にまとめている。日本の場合、強姦といった性と暴力が結びついた非行は約1000件(昭和56～57年度)である。米国の場合、絶対数が日本よりはるかに多く、この問題を重視し、強姦の被害を専門にした心理臨床家も存在している(Finkelhor 1979)。また緊急の面接治療などを行うセンターもある(Halpern 1978)。日本においても社会全体の超勢として、衝動性に対する内的統制が弱くなり、表現が直接的になるに従って、これらの問題はもっと増大していくのではないだろうか。

(2)薬物——少年非行の中で薬物事犯としては俗に「シンナー事件」と呼ばれている非行が多い。これは劇物毒物取締法(俗に劇毒法違反)に違反したトルエンガス吸引の依存状態をいうものである。また麻薬取締法違反としての覚醒剤依存などが増加している(警察白書1983)。女子少年にも少なくない。暴力団と関係のある場合が多い。日本では米国におけるようなマリファナ(大麻)の常習など、シンナー以外の薬物依存が少ないのが特徴ではないだろうか。少なくともこれまで日本の場合、一般に薬物への依存度が低い。心的な葛藤の解決を覚醒剤や幻覚剤を使った行動化によって解決してこなかった。このことは単に、取締りの厳しさによる薬物への接近が困難だったことによるのであろうか。それとも、日本の文化からくる日本の心性の特色があって、それが薬物依存



を少なくしているのであろうか。米国における私のささやかな臨床体験からいって、日本との際立った違いにたいへん印象を深くしているところであり、比較文化的な接近による青年期の心性理解に大きく貢献できる研究領域ではあるまいか。

(3)窃盗——少年非行の中で交通事犯を除いて常にもっとも多いものである。非行の基底には習慣化された窃盗があるが、遊び型といわれる窃盗が注目されている。人がやっているからやってみる、という意識である。ちょっと借りているという気持で、横に置いてある自転車に乗って他の場所に行き、そこに乗り捨てるといった感じなのである。万引も人がやって面白そうだからやってみるといったものである。これらは一般的傾向として所有観念の稀薄化、自と他の心理的分化が未熟で稀薄となっており、自己の欲求が直接的に瞬間的に満たされるべきだという考えからきている。このため罪悪感の形成が薄弱であると同時に、問題や困難を与える責任は外在化され、「放ってあるのが悪い」「そこに置いてあるのが悪い」といった形で事態を眺め、そう扱おうとする。

しかし、このような自と他の心理的分化の未熟さ、稀薄さや、超自我形成の弱さと罪悪感の薄弱さ、問題の外在化といったことは社会一般の目立った傾向になりつつあるのであり、非行少年にみられるのはこのような社会を見事に反映しているのかもしれない。

(4)その他——あまり注目されていないが、少年非行として大きな問題は交通事件といわれるものである。自動車や単車による交通違反、事故による重過失致死傷といった問題である。重過失致死傷を犯した少年は刑法犯・触法少年19万8,701人(1982年度)に対し5万1,107人と約26%を占めている(警察白書1983)。青年期の心理の研究としては自動車やスピードなど交通の問題があまり重要な主題としてとり上げられていないようである。少年の交通事故による死亡も極めて多いし、その中には事故なのか、自殺なのかよくわからないようなものも少なくない。車は凶器になるし、自殺の道具ともなる。これらは重大な問題としてもっと関心を集めてよいのではないだろうか。交通事件においても「ルール」という外的規制が内在化されていないことを示すスピード違反、信号無視といったものが多い。全交通事件数は昭和57年度には173万件を超えている。これは上にのべた自他比の稀薄化、対象としての人間が、ものとして物化されること、衝動性の直接的表現、罪悪感の形成不全、原因帰属の外在化などに加え、スピード感のもつ現実からの超越性、マシンを自分で実際に統制するという幼児的万能感願望が実現されるといったことが考えられるのではないだろうか。

## (5)キャンパスの症状群

キャンパスの症状群とは笠原嘉・山田和夫(1983)の命名によるものであり、大学生にみられる精神病理的症状を総称したものである。笠原・山田の著書には、性、自己確立、留年、精神病、ノイローゼ、スチューデント・アパシー、思春期やせ症、親子関係などの問題が幅広くとりあげられている。大学生群では、青年期の様々の心理的問題が示されるが、ここでは留年、スチューデント・アパシーをとりあげておく。その他の精神病理群については、それぞれ項を別にして後述する。

スチューデント・アパシーとは大学生にあって無気力、ひきこもり、軽うつ気分などを伴い、一見理由のないように見える留年生たちのことである。Walters, P. A. Jr. (1961)によって名づけられた。これが笠原ら(1971)によって日本にも紹介された。日本でも横文字を片仮名にしてそのまま使用されている。日本では大学で精神衛生の問題に携っている学生相談室や保健管理センターの心理学・精神医学の専門家によって記述され研究されている(丸井1968, 倉石・唄中1971, 辻1973, 石川情1969, 細木1972, 遠藤1972, 藤井1975, 笠原1976, 土川1978)。また笠原(1983)は留年などを一括し、「退却神経症」という新しい用語を提唱している。その理由として、留年の心的抑制としてアパシーを問題にしていたのであるが、これらの症状がキャンパス内の大学生だけのものでなくなり、成人にも、高校生などにも見られるようになって、それらを包括的にとらえる用語が必要になったからという。退却神経症の特徴としては、①(病前)性格における強迫的傾向、②優劣劣敗への過敏さと本業部分からの退却、③アイデンティティ葛藤と進路喪失、④部分的退却というダイナミズム、⑤うつ病とうつ状態との関係が深い、などをあげている。また細木(1972, 1976)はIdentity 拡散の1つの表現としてみている。

留年・アパシーの問題は時代を顕著に反映しているのが特徴ではないだろうか。大学生の風俗の変化と共に今後変わりつづける症状群の1つだろう。

## 6. 自殺

最近では子どもの自殺のテーマがジャーナリズムに大きく取り上げられ、社会の関心を集めている。これに伴って子供の自殺、青年の自殺についての著書も出版されている。しかし、社会の関心が高いにも拘らず、子供や青年期における自殺は、統計や資料にみる限り特に近年増加しているわけではない(勝俣, 1978)。青年期の自殺は昭和29年をピークとして、むしろ漸減している。社会的に、自殺に関する関心の高さは、このような事実にも限



らず示されるようになったものである。従って関心の増大には別の要因を求めなければならないであろう。

自殺への心理学的研究からの関心、自殺予防への積極的な関心は Shneidman と Farbero (1957, 1961) および Shneidmann (1967) と Farbero (1974) の積極的な研究によるところが大きいし、また彼らの創設した自殺予防センター (SPC: Suicide Prevention Center) によるところが大きい。彼らの本は日本にほとんど翻訳されている。日本では大原健士郎 (1965, 1975), 稲村博 (1977, 1978), 勝俣映史 (1969, 1979) などが精力的に研究を行っている。日本の自殺研究の高さは世界的に認められており、1977年には国際自殺学会が京都で開催されている。

青年期の自殺については、勝俣 (1978) が「青年心理」の講座として2回に亘って、自殺予防の見地から多角的に研究の展望を行っている。また大学生の自殺の問題も深刻である。永年、学生の自殺の問題に取り組んできた石井完一郎 (1982) は、京大学生懇話室カウンセラーとしての経験を「青年の生と死の間」としてまとめている。自殺の研究の場合、既遂となってしまうと、全くとり返しがつかない事態であることから、問題の追求が困難であると同時に、関係している研究者には、助けることができなかった深刻な心理的挫折感を与えることも少なくない。

## 7. Gender Identity

Gender Identity は性別同一性と訳されている。しかし定訳とまでなっていないので、そのまま原語を当てておきたい。自分の性を男性か女性かのどちらかの性に属するという性別の意識が日常生活の中で問題をつくるのは、思春期からのものであろう。身体変化によって強制される性別の意識は様々の混乱を生む。異性との出会いに混乱を示す状態 (笠原嘉・山田和夫1983) から、もっと複雑な変性 Transvestite や同性愛などまで様々である。性は身体的であると同時に社会的・心理的現象であることから、内的・心理的な混乱が、この性の領域に集中することも多い。既に、青年期の区分で問題にしたように、Sullivan (1953) は前青年期 (思春期) における同性同志の体験を重視した。この体験がしっかりできていると次に訪れる異性との体験がスムーズにいくという観察を行っているのである。青年期にみられる病理的な Gender Identity については及川卓 (1980a, 1980b, 1981, 1983) が同性愛、変性などを包括的に記述している。日本では、同性愛など Gender Identity の問題がどちらかという許容的で、キリスト教圏、回教圏のような不寛容性を示していない。従って Gender Identity の

問題を一般に病理的にみることは多くない。同性愛者に対する異常感や疎外感も比較的少ないようである。

## 8. 摂食障害

過食したり、食べなかったりすることによって生命の危険にまで陥ってしまう心身症であり、思春期やせ症、食欲不振症などと呼ばれている。原語の Anorexia Nervosa は神経性食欲不振症ということになるが、思春期に多発することから日本でこのように呼ばれている。しかし、やせ症は思春期に限定された症状ではない。この問題に分析的に接近した Bruch, H. (1962, 1974, 1978) 以来、数多くの研究がなされている。日本においても報告は多い。ことに下坂幸三 (1961, 1963) の充実した研究は日本での研究の出発点となったとされる。その後、石川清 (1969), 滝川一広 (1978) 藤本淳三 (1979), 渡辺久子 (1980), 野上芳美 (1983) などのものがある。

Bruch (1974) は摂食障害 Eating Disorder を次のように分類している。

- A. 肥満
  1. 精神病理学的特徴を欠いた肥満
  2. 発達性肥満 Developmental Obesity
  3. 反応性肥満 Reactive Obesity
  4. やせ—肥満交替型の人々
- B. 神経性食欲不振症
  1. 一次的神経性食欲不振症 Primary Anorexia Nervosa (思春期やせ症)
  2. 心因性やせ症 Psychogenic Malnutrition
  3. 非典型的神経性食欲不振症 Atypical Anorexia Nervosa

思春期やせ症というのはこの表の中でB—1の群である。いわば純型といってよい。心因性やせ症とは分裂病、うつ病、精神発達遅滞などに伴うものであり、非典型的の不振症とは神経症の反応、思春期のうつ反応として食欲不振を伴うものである。この症状が圧倒的に女性に多いことから、Gender Identity の問題として考察がなされているものも多い。最近、境界例の心的世界の理解がすすみ、Bruch の分類で言うB—2の心因性やせ症などが解明され、その心理的な取り扱いについて洞察が深められている (安岡登他1983)。また比較文化的にみると思春期やせ症や肥満は、発展国における一種の文明病的な性質を有している。心身の相関が、心身の個人的発達のみならず、文化や時代に深く根ざしていることをこの問題はわれわれに示してくれている。

## 9. その他の精神医学的な問題

思春期や青年期に発生していく強迫神経症、様々の恐怖症、分裂病などは、これまでも精神医学の主題としてとりあげられ研究が進められてきた。この中で、対人恐怖症は日本に多く西欧の社会に少ない症状とみなされ、比較文化的にとり上げられてきた(西園昌久 1956, 1970, Tatara 1976, 里村淳 1979)。また対人恐怖症は大学生の中の典型的な神経症症状でもあり、保健管理センターや学生相談担当の心理臨床家が接触することが多い。そして報告書も数多く出されている。伊藤義美(1983)はこれら対人恐怖症に関する研究の文献的展望を行っている。成書としては、山下格(1977)、内沼幸雄(1977)、小川捷之編(1975)、木村駿(1982)などがある。

青年期の精神医学として最近注目されているのは、青年期うつ病と青年期境界例の問題であろう。青年期境界例については既に述べたような Masterson, J. (1972), Kernberg, O. (1976) や Rinsley, D.B. (1974) などの研究によるところが大きい。日本でも小此木啓吾(1970)、神田橋條治(1970)、河合洋(1965)などを出発点として、最近関心が高まっている。日本精神分析学会は1982年の第28回大会の主題を境界例と人格障害として研究発表とシンポジウムが行われた(精神分析研究1982)。

この中で特に前青年期など、より年齢の若いものを問題にし、これまで注目されていなかった境界例人格構造に着目しているのが森省二(1978)、皆川邦夫(1980)である。とり扱われているのはいずれも登校拒否の事例であるが、青年期心性の一層詳細な観察資料を得た研究論文である。

また最近注目されるものに、境界例の理解に心理学的検査法、就中、ロールシャッハテストを用いて研究しようとする努力がみられる。片口安史・空井健三らの編集になる「年報ロールシャッハ研究」にも報告があるが、最近出版された馬場禮子編(1983)の『境界例』が独創的である。米国では既にそのような研究として Kwawer, J. (1980) のものがあるが、日本の心理学者の手になるこのような充実した著書が出版されたことをよろこびたい。精神病院、養護施設、矯正施設に勤務する心理臨床家も少なくないが、收容される青少年たちの心理学的理解の方向として、この境界例人格障害に着目することは極めて重要ではないだろうか。というのは、青少年期境界例と診断されている人達の示す外的行動は、Masterson, J. (1972, 75) らの記述を借りると、登校拒否、怠学、暴力、家出、盗癖、薬物依存、性的逸脱行動などの行動障害を示し、集中力困難、心身症状、強迫行動や観念、離人感、摂食障害などを示している。このような人達は教育相談や病院の外来における取り扱いを拒否する場合が多く、施設收容が治療法として重要な意義をもってくる

と考えられるからである。

また最近、青年期のうつ病に関する関心が高まっている。その理由は、既にのべた登校拒否やスチューデント・アパシーの増大とその症状の1つとしてうつ状態が示されることから、心理臨床の主題としても重要なものになりつつあるからである。精神病理学研究としては、笠原嘉・大井正巳(1975)の「ティーンエイジャーのうつ病」がある。彼らは若年に現われる(躁)うつ病についての特色を次のようにまとめている。

(1) 躁・うつ両相とも成人のものより持続が短い。交替が頻繁・十歳台前半では長くて2・3週、短くて1週間程度で躁うつが交替が起こる。

(2) 成人の躁うつ病を基準とすると、非典型的の病像が多い。非行とか心身症などの仮面性病像を呈したりすることもある。

(3) 予後のよくないものが少なくない。分裂病へ移行したり、自殺に終るものもある。

青年期の躁うつ病については清水将之(1987)もまとめている。大井正巳(1978)は前思春期および思春期のうつ病をいくつかの種類化している。また高山直子・吉川加代(1981)は抑うつ症の発病契機から3つの型に分類できるとしている。心理家に参考になると思われるので次にこれを示しておこう。Ⅰ型—幼児期および学童期に経験した喪失体験を処理できないまま、以後の生活に適応しかねて発症したもの。Ⅱ型—幼児期の生育歴にⅠ型同様の問題があり、それに加えて、成人してから後に喪失を経験し、それによって発症したもの。Ⅲ型—思春期における独立—依存の葛藤による自己評価の混乱を処理できずに発症したもの。いわゆる青年期のうつ病に幼児期の喪失体験や思春期の独立—依存経験という心理的経験の重要性が大きいということが注目される。

躁うつ病やうつ状態についての青年期の研究はほとんど精神科医の研究者によっていることがわかる。しかし、この領域は心理学的にも接近が可能であり、理解を進める資料を提供するための研究を深めていけるのではないだろうか。

## まとめ

青年期の諸問題を臨床の観点からとり上げた。ここでは問題行動や症状の理解ということに限定し、それも心理学からみた場合どうなるか、心理学はどのように関与できるかということについて模索したつもりである。本誌の性質上、処置や治療の問題には入らなかった。臨床の観点から青年期の問題をみると、心理学者の力がまだ微々たるものであり、大部分が精神医学者によっておし

すすめられていることがわかる。その上、日本の独創的な研究はそれほど多くなく、アイディアは米国での研究を継承してなされるものが多かった。本展望でとりあげることのできたのは、膨大の研究の中のほんの一部であり、しかも筆者の狭い臨床経験に照らして有意義と思われるものに過ぎない。もっと重要な論文や著書が抜け落ちているかもしれないが、それらは今後また新しい展望としてとりあげてみたい。

## 引用文献

- 上里一郎編 1980 自殺行動の心理と指導, ナカニシヤ出版
- A. Psy. A. (American Psychiatric Association) 1980 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. (The Third Edition). DSM-III. (高橋三郎ほか訳「DSM-III 精神障害の分類と診断の手引」医学書院 1982)
- A. P. A. (American Psychological Association) 1953 Ethical Standards of Psychologists. Washington, D.C. American Psychological Association.
- , 1959 Ethical Standards of Psychologists (Revised). *American Psychologist*, 14, 279-282.
- , 1963 Ethical Standards of Psychologists (Revised). *American Psychologist*, 18, 56-60
- , 1966 Standards for Educational and Psychological Tests and Manuals. Washington, D. C. American Psychological Association.
- , 1960 Standards for APA Directory Listings of Private Practice. *American Psychologist*, 15, 110-112.
- , 1967 Case Book on Ethical Standards of Psychologists. American Psychological Association.
- , 1963 Guiding Principles for the Human Care and Use of Animals. *American Psychologist*, 18, 211.
- , 1981 Directory. American Psychological Association, 1981 Edition, xliii-xlvii.
- 馬場謙一 1976 自我同一性の形成と危機 (笠原ほか編「青年の精神病理」1. 1976, 111-130)
- (編), 1982 青年期の精神療法. 金剛出版
- 馬場禮子 1983 境界例, 岩崎学術出版
- Blos, P. 1962 On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation. Free Press of Glencoe, N. Y. (野沢栄司訳「青年期の精神医学」誠信書房 1971)
- , 1967 The Second Individuation Process of Adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186
- , 1970 The Young Adolescent: Critical Studies. The Free Press., N. Y.
- Bruch, H. 1962 Perceptual and Conceptual Disturbances in Anorexia Nervosa. *Psychosomatic Medicine*, 24, 189
- , 1974 Eating Disorders. Routledge and Kegan Paul, London.
- Bruch, H. 1978 The Golden Cage. Open Books. (岡部祥平, 溝口純二訳「ゴールデンケージ」星和書店 1979)
- Brucks, R. 1955 「暴力教室」メトロ・ゴールウィン・メイヤー社
- 中国新聞社編 1982 ボクは15歳, 中国新聞社
- Coles, R. 1963 Serpent and Doves: Non-Violent Youth in the South. in *Youth: Change and Challenge*, edited by E.H. Erikson, Basic Books, N. Y.
- Eichhorn, A. 1925 Verwahrloste Jugend. Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Vienna.
- 遠藤辰雄編 1972 留年学生をめぐる一原因と対策管見, 厚生補導 72.
- Erikson, E. H. 1950 Childhood and Society. W.W. Norton, N. Y. (仁科弥生訳「幼児期と社会」みすず書房 1977)
- , 1958 Identity and the Life Cycle. *Psychological Issues*, No.1. (小此木啓吾訳「自我同一性」誠信書房 1973)
- , 1958 Young Man Luther. W.W. Norton, N. Y. (大場隆訳「青年ルター」教文館 1974)
- (ed), 1963 Youth: Change and Challenge. Basic Books, N. Y. (栗原彬訳「青年の挑戦」北望社 1971)
- , 1968 Identity: Youth and Crisis. W. W. Norton, N. Y. (岩瀬庸理訳「主体性 — 青年と危機」北望社 1969)
- Evans, R. (ed) 1967 Dialogue with E. H. Erikson. Harper and Row, N. Y. (岡堂哲雄訳「エリクソンとの対話」北望社 1971)
- Farberow, N. L. & MacKinnon, E. S. 1974 A suicide prediction schedule for neuropsychiatric hospital patients. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 158, 408-419.
- Finkelhor, D. 1979 Sexually Victimized Children. Free Press, N. Y.

- Friedlander, K. 1947 *The Psycho-analytical Approach to Juvenile Delinquency*. Routledge & Kegan Paul, N. Y. (懸田克躬訳「少年不良化の精神分析」みすず書房 1953)
- 藤井 虔・古賀一男 1975 卒業留年に関する研究(1), 京都大学学生懇話室紀要 5.
- 藤本淳三 1979 思春期やせ症 (笠原嘉ほか編「青年の精神病理」1, 弘文堂 177—199)
- 福島 章 1978 現代青年心理ノート, 日本教文社
- , 1979 対抗同一性, 金剛出版
- Glueck, A. E. 1950 *Unraveling Juvenile Delinquency*. Commonwealth Fund, N. Y.
- Gunderson, J. G. & Singer, M. T. 1975 Defining Borderline Patients: An Overview. *American Journal of Psychiatry*, 132, 1—9.
- Hall, G. S. 1904 *Adolescence: Its Psychology and Its Relations to Physiology, Anthropology, Sociology, Sex, Crime and Education*. Appleton-Century Crofts, N. Y. (元良勇次郎ほか訳「青年期の研究」同文館 1910)
- Halpern, S. et al. 1978 *Rape: Helping the Victim*. Medical Economics Co. N. J.
- Harley, M. 1974 *The Analyst and the Adolescent at Work*. The New York Times Books, Co. N. Y.
- Healy, W. & Bronner, A. F. 1936 *New Light on Delinquency and its Treatment*. Yale University Press. (樋口幸吉訳「少年非行」みすず書房 1956)
- 平井信義 1978 登校拒否児, 新曜社
- 本田勝一 1978 子どもたちの復讐, 上, 下, 朝日新聞社
- 細木昭敏 1972 留年者と大学紛争, 保健の科学14—5号 (小此木啓吾編「現代のエスプリ」78号 1974)
- , 1976 留年学生について, (笠原嘉ほか編「青年の精神病理」1, 弘文堂 201—216)
- 穂積隆信 1982 積木くずし, 桐原書店
- , 1983 映画「積木くずし」(斎藤正光監督, 東宝映画社)
- 稲村 博 1977 自殺学, 東京大学出版会
- , 1978 子どもの自殺, 東京大学出版会
- , 1980 家庭内暴力, 新曜社
- , 1983 思春期挫折症候群, 新曜社
- 稲村博, 詫摩武俊 1980 登校拒否, 有斐閣新書
- 井上公大 1980 非行臨床, 創元社
- 石川清ほか 1969 大学生に見られる学校恐怖症, 精神経誌, 71, 71—81
- 石川 清 1969 Anorexia Nervosa の症状と成因について, 精神経誌 1203
- 石井完一郎 1982 青年の生と死との間, 弘文堂
- 伊藤義美 1983 対人恐怖症に関する文献的概観, 名古屋大学教養部紀要 B. 27, 133—146
- 岩崎徹也 1973 対象関係論の歴史と現況, 精神分析研究18, 1—10
- , 1980 同一性障害と病院精神医学 (小此木啓吾編「青年の精神病理」弘文堂, 277—296)
- Jacobs, J. & Teichner, J. D. 1971 *Adolescent Suicide*. John Wiley, N. Y.
- Jacobson, E. 1964 *The Self and the Object World*. International University Press, N. Y. (伊藤洸訳「自己と対象世界」岩崎学術出版, 1981)
- Johnson, A. M. 1941 *School Phobia*. *American Journal of Orthopsychiatry*, 11, 702—711
- 上出弘・伊藤隆二 1980 学校ぎらいの子ども, 福村出版
- 神田橋條治 1970 境界例の治療, 精神医学, 12, 486—491
- 笠原 嘉 1971 大学生にみられる特有の無気力について, 全国大学保健管理協会会誌, 7, 64.
- , 1976a 精神科医のノート. みすず書房
- , 1976b 今日の青年期精神病理像 (笠原嘉ほか編「青年の精神病理」1, 弘文堂 3—27)
- , 1977 青年期, 中公新書
- , 1978 退却神経症 Withdrawal Neurosis という新カテゴリーの提唱 (中井久夫ほか編「思春期の精神病理と治療」岩崎学術出版, 287—319)
- 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 1976 青年の精神病理 1, 弘文堂
- 笠原嘉・大井正己 1977 ティーンエイジャーのうつ病 (宮本忠雄編「躁うつ病の精神病理」2, 弘文堂, 127—152)
- ・山田和夫 1983 キャンパスの症状群, 弘文堂
- 片口安史・空井健三他編 ロールシャッハ研究 (1956—) 金子書房
- 勝俣英史 1969 米国における自殺学の誕生と自殺予防計画, 臨床心理学研究 8, 51—56
- , 1978 青少年の自殺の心理学的研究(其), 17号, 163—182, 18号, 161—181, 金子書房
- , 1979 自殺の予測 (上里一郎編「自殺行動の心理と指導」ナカニシヤ出版 125—158)
- 家庭裁判所非行問題研究会 1979 日本の少年非行, 大成出版
- 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理, 中央公論社
- 河合 洋 1965 境界例の力動精神病理学的研究, 精神分析研究12, 19—37
- , 1983 「戸塚ヨットスクール」事件をめぐる

- て感じたこと, 児童青年精神医学とその近接領域, 24, 59—60
- 警察庁 1983 警察白書昭和57年度版, 大蔵省印刷局
- Keniston, K. 1965 *Uncommitted*. Hartcourt, Brace & World, N. Y.
- , 1971 *Youth as a Stage of Life*. In *Adolescent Psychiatry* (Feinstein, A. et al. ed) Vol. 1. Basic Books, N. Y.
- Kernberg, O. 1975 *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. Jason Aronson, N. Y.
- , 1976 *Object Relations Theory and Clinical Psychoanalysis*. Jason Aronson, N. Y. (前田重治監訳「対象関係論とその臨床」岩崎学術出版 1983)
- 木村 敏 1970 自覚の精神病理, 紀伊国屋新書
- , 1972 人と人との間, 弘文堂
- , 1973 異常の構造, 講談社現代新書
- , 1975 分裂病の現象学, 弘文堂
- , 1982 時間と自己, 中公新書
- 木村 駿 1982 日本人の対人恐怖, 勁草書房
- Knight, R. 1954 *Psychoanalytic Psychiatry and Psychology*. International University Press, N. Y.
- 小池清廉 1983 いわゆるスパルタ式訓練法について, 児童青年精神医学とその近接領域 24, 61—62
- 倉石精一・唄中達郎 1968 留年に関する一調査, 京都大学教育学部紀要14
- 栗原 彬 1982 歴史とアイデンティティ, 新曜社
- Kwawer, J. et al. 1980 *Borderline Phenomena and the Rorschach Test*. International University Press, N. Y.
- Lester, M. 1983 「処刑教室」日本ヘラルド映画社
- Lichtenstein, H. 1977 *The Dilemma of Human Identity*. Jason Aronson, N. Y.
- Lifton, R. J. 1970 *History and Human Survival*. Random House, N. Y. (小野泰博・吉松和哉訳「終りなき現代史の課題」誠信書房)
- Lorand, S. & Schneer, H. I. 1961 *Adolescents: Psychoanalytic Approach to Problems and Therapy*. P. B. Hoeber, Inc. N. Y. (非行問題研究会訳「青年の精神分析 I, II」誠信書房 1975)
- 丸井文雄 1968 留年生に対する対策, 厚生補導, 22
- Masterson, J. F. 1972 *Treatment of the Borderline Adolescent: A Developmental Approach*. John Wiley & Sons Inc. N. Y. (成田善弘・笠原嘉「青年期境界例の治療」金剛出版 1976)
- , 1974 *Intensive Psychotherapy of the Adolescent with the Borderline Syndrome*. In G. Caplan (ed) *American Handbook of Psychiatry*. Basic Books, N. Y.
- , 1980 *From Borderline Adolescent to Functioning Adult: The Test of Time*. Brunner/Mazel Pub., N. Y. (作田勉他訳「青年境界例の精神療法」星和書店 1982)
- Mead, M. 1953 *Coming of Age in Samoa*. New American Library, N. Y. (畑中幸子他訳「サモアの思春期」蒼樹書房 1976)
- 皆川邦夫 1980 青春期・青年期の精神分析的発達論 (小此木啓吾編「青年の精神病理」2. 弘文堂43—66)
- Mitcherlich, A. 1963 *Auf dem Weg zur vaterlosen Gesellschaft*. R. Piper, München (小見山訳「父親なき社会」新泉社, 1972)
- 水島恵一 1971 増補・非行臨床心理学, 新書館
- 森 省二 1978 思春期と境界例 (中井久夫他編「思春期の精神病理と治療」岩崎学術出版)
- 森野礼一 1982 性的非行の心理臨床, 誠信書房
- 村瀬孝雄 1972 青年期の人格形成の理論的問題, 教育心理学研究, 20, 46—52
- 1976 青年期危機概念をめぐる実証的研究 (笠原他編「青年の精神病理」I, 弘文堂)
- 村山正治 1972 登校拒否児, 黎明書房
- 西田博文 1976 現代社会と青年期の神経症的病理 (笠原他編「青年の精神病理」I, 弘文堂)
- 西平直喜 1964 青年心理学, 大日本図書
- , 1975 青年心理学, 共立出版
- , 1978 a. b. アイデンティティ (1), (2), 青年心理 7, 8号, 金子書房
- 1978 c. d. 続アイデンティティ (1), (2), 青年心理 11 167—186, 12号 153—172, 金子書房
- 西園昌久 1956 赤面恐怖症の精神分析, 精神分析研究 3, 11—15
- , 1970 対人恐怖の精神分析・精神医学 12, 375—381
- , 1980 精神分析の最近動向—東洋と西洋との対話の可能性, 九州神経精神医学, 26, 162—170
- , 1983 精神分析の展開, 金剛出版
- 野上芳美 1983 青年期の「気晴し食い」(清水将之他編「青年期の精神病理」3, 弘文堂 233—250)
- Offer, D. 1969 *The Psychological World of the Teen-Ager*. Basic Books, N. Y.
- 小川捷之 1975 対人恐怖 (現代のエスプリ No.127), 至文堂
- Ogura, K. 1980 *Alternating Seduction, Symbiosis,*

- and Murderousness by Japanese Children toward Their Mothers: A Syndrome of a New Era? In Anthony, J. & Chiland, C. (ed.) "The Child in His Family. Vol. 6. Wiley-Interscience, 383-388.
- 大井正己 1978 前思春期および思春期のうつ病 (中井久夫・山中康彦編「思春期の精神病理と治療」岩崎学術出版, 89—122)
- 大原健士郎 1965 日本の自殺, 誠信書房  
——(編) 1975 自殺学, 全5巻, 至文堂
- 及川 卓 1980a 青年期の性的同一性 (Sexual Identity), 精神経誌 82, 154  
——, 1980b 二次的性的同一性, 精神経誌 82, 525  
——・小此木啓吾 1981 性別同一性障害, 現代精神医学体系 8, 中山書店  
——, 1983 男性性確立の挫折と崩壊, 清水将之他編「青年の精神病理」3, 105—135
- 沖原 豊 1980 体罰, 第一法規出版  
——, 1983 校内暴力, 小学館
- 小此木啓吾 1970 境界例の概念とその臨床的検討, 精神医学 12, 474—485  
——, 1974 臨床家エリクソンのジレンマ, 現代思想 2—3, 111—124 青土社  
——(編) 1973 アイデンティティ, 「現代のエスプリ」, 78号, 至文堂  
——, 1978 モラトリアム人間の時代, 中央公論社  
——(編), 1980 青年期の精神病理 2, 弘文堂  
——, 1983 精神科医からみた戸塚ヨットスクール事件, 中央公論, 9月号, 176—205
- Proefrock, D. W. 1981 Adolescent: Social Fact and Psychological Concept. Adolescence, 14, 64, 851-858.
- Rinsley, D. B. 1974 Residential Treatment of Adolescents. In Arieti, S. (ed) American Handbook of Psychiatry, 2nd Edition, Vol. 2, 353-366. Basic Books, N. Y.
- 佐治守夫・神保信一編 1979 登校拒否, (現代のエスプリ) 139号 至文堂
- 里村 淳 1979 ドイツと日本の対人恐怖症の比較精神医学的研究—とくに赤面恐怖症について, 臨床精神医学 8, 329—337
- Shneidman, E. S. (ed) 1967 Essays in Self Destruction. Science House, N. Y.
- Shneidman, E. S. & Farberow, N. L. 1957 Clues to Suicide. McGraw-Hill, N. Y.
- Shneidman, E. S. & Farberow, N. L. 1961 The Cry for Help. McGraw-Hill, N. Y.
- 佐藤忠司 1983 心理学専攻者の資格問題について, 心理臨床学研究 1, 85—94
- 佐藤修策 1959 神経症の登校拒否行動の研究, 岡山中央児童相談所紀要 4, 1  
——, 1968 登校拒否, 国土社
- 精神分析学会 1983 境界例特集, 精神分析研究 27, 1—52
- 青少年問題研究会 1983 青少年問題白書 昭和57年度版, 大蔵省印刷局
- 千田夏光 1978 性的非行, 汐文社
- 清水将之 1981 青年期の両極性躁うつ病について (木村敏編「躁うつ病の精神病理」弘文堂 B253—269)  
——・村上靖彦編 1983 青年期の精神病理 3, 弘文堂
- 下坂幸三 1967 青思期やせ症 (神経性無食欲症) の精神医学的研究; 精神経誌 63, 1041  
——, 1963 神経性無食欲症 (青思期やせ症) の精神医学的諸問題, 精神医学 5, 259
- 十亀史郎 1983 ヨットスクール問題によせて, 児童青年精神医学とその近接領域, 24, 138—140
- 曾根中生 1983 「夜をぶっとばせ」フィルムワーカーズ, PIC ソニー提供
- Spranger, E. 1926 Psychologie des Jugentalters. Quelle & Meyer Verlag. (土井竹治訳「青年の心理」刀江書院 1957)
- Sullivan, H. S. 1953 Interpersonal Theory of Psychiatry. W. W. Norton, N. Y.
- 驚見たえ子ほか 1960 学校恐怖症の研究, 精神衛生研究 8, 27—56
- 田畑治ほか 1978 臨床青年心理学序説, 名古屋大学教育学部紀要 24, 85—106
- 高木隆郎 1962 学校恐怖症の問題点, 児童精神医学とその近接領域 3, 42  
——, 1983 登校拒否の理解, (内山喜久雄編「登校拒否」金剛出版 9—80)
- 高山直子・吉川加代 1981 若年性うつ状態の心理構造およびその心理療法に関する一考察 (木村敏編「躁うつ病の精神病理」弘文堂 165—189)
- 滝川一広 1978 思春期における食事の障害 (中井久夫・山中康彦編「思春期の精神病理と治療」岩崎学術出版, 223—253)
- 鐘幹八郎 1962 学校恐怖症に関する一考察, 児童精神医学とその近接領域 3, 43,  
——・上里一郎 1979 自我同一性の病理と臨床, ナカニシヤ出版  
——, 1980 家庭内暴力はどうして起るか (小此木啓吾・小川捷之編「臨床社会心理学」自律と依存, 93—212, 至文堂)

- , 1981 Parental Abuse: Violence in Family in Japan. Presented at Austen Riggs Center.
- , 1983 エリク H. エリクソン (荻野恒一他編「現代精神病理学のエッセンス」ペリカン社 352—374)
- , 1984 同一性研究の展望, ナカニシヤ出版 (印刷中)
- Tatara, M. 1976 Cultural Characteristics of Taijin-Kyofu-sho (Anthropophobia) and its Psychotherapeutic Treatment. *Hiroshima Forum for Psychology*, 3, 67-71.
- 土川隆史 1978 留年の心理と対策, 厚生補導, 144
- 辻 悟 1973 青年期における主体の硬直的な退去とその現代的背景—不登校, いわゆる学生の Apathy を中心に, 精神医学 15, 1279—1289
- 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学, 弘文堂
- 内山喜久雄 1983 登校拒否 金剛出版
- 瓜生武他 1983 家庭内暴力・校内暴力, 有斐閣新書
- 渡辺久子 1980 摂食障害の治療 (小此木啓吾編「青年の精神病理」2, 弘文堂 139—170,
- 山下 格 1977 対人恐怖, 金原書版
- 安岡誉・徳永雄一郎 1983 神経性食欲不振症の症状解消後の人格構造の特性について, 精神分析研究, 27, 1—6
- Walter, A.P. Jr. 1961 Student Apathy. In Blain, G. B. Jr & McArthur, C. C. (ed) Emotional Problems of the Student. Appleton-Century Crofts, N. Y. (石井完一郎他訳「大学生の情緒問題」光文堂 1971)
- 我妻洋編 1973 非行少年の事例研究, 誠信書房
- Weiner, I. B. 1970 Psychological Disturbance in Adolescence. John Wiley & Sons, Ltd., N. Y. (野沢栄司監訳「青年期の精神障害」I, II, 星和書店 1979)